

Title	まえがき
Author(s)	飛鳥井, 雅道
Citation	人文學報 = The Zinbun Gakuh : Journal of Humanities (1990), 67: 1-1
Issue Date	1990-12
URL	https://doi.org/10.14989/48340
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

まえがき

この「人文学報」67号は、日本部の共同研究「国民文化の成立 II ナショナリズムの諸相」(1983~88)の報告書として、特集された。報告書としては、本研究班の第一期「I 国権と民権」(1978~83)が『国民文化の成立』として、1985年に筑摩書房より刊行されたのに続くものである。

前回の報告書が、明治初期から明治10年代、すなわち1890年頃までを主な分析対象としていたのに対して、ここでは、1890年代が主要な対象として分析される。本研究所の共同研究としては、すでに1950年代の坂田吉雄教授を班長とする『明治前半期のナショナリズム』(1958年、未来社)があり、わたしたちの共同研究もこの成果を受け継ごうとしているものだが、30年の歳月を経たにもかかわらず、はたしてどれだけの新しい見解を打ち出しえたか、自信はない。

30年前は、ちょうど、日本近代化論が導入されはじめた頃であり、坂田先生の班はいわばその先頭にたっていた感があった。近代化論も以後大きく変貌した。わたしたちは必ずしもこの論に従う者ではないが、ただ言えることは、わたしたちが今改めて、日本近代の欧米とは違う部分に、すなわち、ついに欧米になりきれない部分に、こだわりはじめていることであろう。

各論文は、衆議院(飛鳥井)、貴族院(佐々木)、村(奥村)、都市(辻)における特殊日本の問題を、期せずして強調することになった。また、ナショナリズムの発現において(山室)、近代天皇制を支える発想そのもののなかに(羽賀)、日本のありかたを再考しなければならなかった。教育勅語も、その発布以後展開した状況に為政者がいかに対応しなせねばならなかったかを探り(小股)、また、前近代から位階制を持ち込んでくる在り方の考察も(藤井)、必然となった。過去の文化的遺産たる法隆寺を発見する際にも(井上)、西鶴を復興する際にも(平田)、明治特有の意味が付されねばならない。

こうした明治の状況が何を意味していたのかを見据えることによってしか、文化全体の構造は見えてこないと確信している。御批判をこいたい。

おわりに、おわびを記させていただきたい。班研究が終了し、班員諸氏の論文が寄せられてから、長い時間がたった。公刊の遅れは、もっぱら班長たる飛鳥井が体をこわし、報告書の完成をなしえなかったことによる。また、本研究班に参加されたFred G. Notehelfer カリフォルニア大学教授からは、帰米時に岡倉天心について論文をいただいていたのに、公刊の遅れから、氏の論文は英語で *Journal of Japanese Studies* Vol. 16, No 2 (Summer 1990) に発表されることになった。心からお詫びしたい。

1990年9月

飛鳥井雅道